

JABI 関西ベンチャー学会 Joint Forum

(2025 年 3 月 22 日 日本時間午前 10 時～12 時)

司会： フォーラムへ参加いただきありがとうございます。トータルで 70 名の方々ですね。DR で 22 名、プラスネットで 48 名。今既に 70 名の方々から登録いただいておりますとのこと。本日は、教育で日本の未来を切り拓く処方箋というテーマでフォーラムを行います。まずは関西ベンチャー学会の定藤会長よりご挨拶よろしくをお願いいたします。

定藤： シリコンバレーの皆さん、こんばんは。日本の皆さんおはようございます。3 月までは、私は関西ベンチャー学会の会長職でした。副会長の文能先生さんが、会長に就任されておりますが、今日はご挨拶させていただきます。

先ほど司会の大永さんからご紹介がありましたように、この JABI さんとの日本関西ベンチャー学会のジョイントフォーラムは 3 回目になります。2021 年 10 月に両団体が提携しまして、第 1 回のフォーラムを開催しました。これはシリコンバレーのエコシステムから学ぶということで、今から思い出ますと大永さんとトム岡田さんからアメリカシリコンバレーの最新のサイエンス、スーパーテクノロジーについてご紹介いただいたりしました。第 2 回目は、2022 年、コロナの時期だったんですけども、11 月に第 2 回目を開催しています。この時は今日の話題にもなりますが、釣島先生が刊行されました、『サクラジャパン復活への道』という書籍を題材にしながら、相互に意見を交わしました。

本日は第 3 回目でありまして、その中でも特に日本の教育の問題、今の遅れている原因ではないかという意見を相互に話題にしている状況です。私がアメリカ留学したのは 40 年前のことですので、私が教えている関西学院大学の教え子であり、留学経験のある国際学部在籍している明石さんに来てもらって感じていることを話していただけたらと思います。

司会： 続きまして、JABI (Japan America Business Initiatives Silicon Valley) のトム岡田会長からご挨拶をいただきます。

トム岡田： 皆さんおはようございます。こんばんは。時差があると思いますので、朝と夕方ですけども、今日はよろしくをお願いいたします。ジャパンアメリカビジネスイニシアティブは、本日司会をなさってもらっているテッド大永さんが創立されて、もう十数年になります。私も 10 年ぐらい前から関わっていて、シリコンバレーのスピーカーに登壇いただいて、日本向けに情報発信をするということをやってきました。

会の目的としては、日本の企業を活性化させるために中小企業の方にシリコンバレーを知っていただくために、シリコンバレーのコンサルタントの方が集まって作った NPO 法人です。最近は、ビジネスにフォーカスするだけではなくて、啓蒙活動ということで、なるべく若い人たちに参加していただこうと、ボランティアのインターンとしてイベント活動を手伝ってもらっています。なるべくその若い世代にいろんな情報を発信して、一緒にやっというていこうということで、この数年は活動内容を変えて、どちらかというと日本向け、もしくは日本からアメリカへと情報発信をしています。

人事の分野であったりとか、会計経済の分野であったりとか、バイオ、再生エネルギーとかいろんな分野の専門家がたくさんいらっしゃるの、その人たちに最新の情報の話をしてもらっています。最近 AI 関連のイベントも多く、月に一度はシリコンバレーでのリアルと、ハイブリッドで行い、できないときはオンラインという形でスピーカーを呼んで発信しております。

関西ベンチャー学会、神戸ベンチャー研究会とは、お互いのイベントに毎回参加していただいています。今日も若い人にたくさんお声掛けして、来ていただいています。本当にどうすればその若い人たちをサポートできるのかとい

うことを自分自身も考えて行動しなきゃいけないと思うとともに、やっぱり行動して本当に変えていくのは若い人たちですから。優秀な人はどんどん海外に出ていくようなことが起こっていますので、そういったことも含めて考えて、若い世代にね、行動を起こしていただけるようなきっかけになればと思います。なので釣島先生のご著書をまだ読んでいらっしゃる方は、釣島先生のご経験もたくさん紹介されていて、アメリカと日本の違いもよくわかるので、ぜひ読んでいただいて考えるきっかけになればというふうに思います。

司会：はい、ありがとうございます。改めまして、本日司会を務めさせていただきます JABI のファウンダー、大永英明でございます。私自身は、日本の高校を卒業してアメリカの大学に留学してそのままアメリカに残ったタイプです。JABI の現会長のトムさんと同じように、アメリカの大学を卒業して、そのままアメリカの企業に就職して、その後、日本に約 5 年間駐在した経験はあります。現在はシリコンバレーに住んでおりますけども、気が付けばアメリカ生活 50 年以上になりました。日米両方の教育を受けた経験があるので、本日のテーマは私にとっても非常に身近なものであると考え、その立場を生かしながら、本ジョイントフォーラムの MC として進行を務めさせていただきます。

定藤さんの方からすでにお話がありましたけれども、JABI と関西ベンチャー学会は 7 年前に シリコンバレーで定藤さんとの再会をきっかけにスタートしました。両団体が持つ知見やネットワークを生かして、日米間のビジネス、そして教育分野での協力を深めてまいりたいと思います。それでは本日よりよろしくお願いいたします。

今日のフォーラムの目的ですが、先ほど少しお話がありましたように、2021 年に社会貢献のさらなる推進と活動の活性化ということで、両団体が提携したわけです。その一環として、ジョイントフォーラムをスタートいたしました 2022 年 11 月第 2 回のジョイントフォーラムを開催して、釣島先生のご著書、『桜ジャパン復活への道』に基づいて、日米のビジネス、教育、国民性の力から学ぶ、これからの日本というテーマで議論を深めました。特にこのフォーラムでは、前回のフォーラムにおいて、失われた 30 年からの日本が脱却できない理由について 一定の理解が進んだものの、時間の制約もあり、十分に議論をすることができなかったわけです。

それで前回の議論を踏まえて今回は釣島先生の新しい著書、『日本の未来を切り拓く 25 処方箋』を基にこれからの日本の未来、リーダー、そして起業家を育成するために、どのような教育手法や環境が必要なのかということについて今回話していきたいと思います。今回のフォーラムの進行は事前にリストアップした 4 つのテーマについて、私が釣島先生の方にそれぞれの問題提起に至った理由をお伺いして、それからディスカッションに入りたいと思いますので、ぜひ積極的にご参加ください。今回の 4 つのテーマは、まず 1 つ目が「チャレンジ精神を育む教育、初等教育、高等教育、受験制度の在り方について」です。2 つ目が「グローバルな舞台でのコミュニケーションを可能にする教育」。3 つ目が「企業化を育成するための実践的教育、ビジネスプラン」とかですね、いろいろありますけども、そういった話をしたいと思います。そして最後に「感性、創造力、問題解決を養うアーツ、リベラルアーツ教育」という感じでお話をしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。では最初のテーマに移ります。まずチャレンジ精神を育む教育として、釣島先生はこの章ではどういった現状の懸念を問題提起されたのでしょうか。詳細は議論の中で多くの方が語られるコメントとかいろいろ話されると思いますけども、釣島先生の方でのこのビッグピクチャー、外観としての懸念をちょっとお聞かせいただけますでしょうか。

釣島：大永さん、岡田さん、ありがとうございます。しかし世界情勢は本当に大変になってきましたね。今まで世界が民主主義ってですね、アメリカが何とか抑えていたのですけれど、今どうですか。プーチン、トランプ、習近平ね、みんな大国で世界を支配する。もう経済的、政治的に見ておれませんか。それでね、これから今日のテーマとしてね、どうしてこの日本がこんなめっちゃめっちゃになってきたのを復興するかということとね、ぜひ皆さんで議論してほしいと思うんです。それでね、皆さん考えてほしいな。今、日本が落ちた落ちたと言ってますけども、1980

年代は、アメリカがなんとむちゃくちゃ落ちたんです。なんで落ちたかという、経済的に日本と西ドイツにめっちゃめっちゃにやられてね、日本がアメリカの土地を買うとかね。それで、その時のね、アメリカの政治家、凄かったですね。その時のアメリカの政治家、レーガン大統領さん。アメリカというのは、西ドイツと日本にやられて、もうこの国は危ない。なんとか復興をしないといけないと「危機に立つ国家アメリカ」を宣言した。どうして復興していくのか。技術ですか。政治ですか。彼は違う、彼は教育。教育こそが、この今、ベタベタにやられたアメリカを復興する。これでいかないといけない。日本と西ドイツに負けたのは、アメリカの教育が間違っていたと宣言した。なんで間違っていたかという、もう基礎教育が充分なされていなかった。私はその頃アメリカにいたんですけど、字が読めない人達が多くいるなど基礎教育に問題が多かったのもその改善から始めた。その時のリーダー、日本は中曽根さんでした。イギリスはサッチャーさん3人とも保守主義のしっかりしたリーダーであった。イギリスも、その時は英国病、それはイギリスが戦後、左翼の力が強く、過度の福祉国家で「ユリカゴから墓場まで」と言われていましたが、国民全体が全然みんな働かなくなってしまう。それをイギリス病と言います。その時に出てきたのがサッチャーさん。レーガンさんと同じこと言ってたんです。イギリスというのは、もともと大英帝国で世界を制覇していた。ところが自信を無くしてしまった。同じように、サッチャーさんがイギリスを回復するのは教育だと。きちっと教育制度を元へ戻して、サッチャーさんが頑張ると、イギリスもその時見事にイギリスが持ち直った。そういうことで、今日は大永さんが言っていたように、日本は大変になってきた。アメリカ、イギリスに学ぶ意味でも、今日皆さんがこれから議論していただいて、どうも日本の教育はまずいということを、ディスカッションしていただけたらどうかと。以上です。

司会：ありがとうございます。私個人的には、人間形成、つまり教育の中で一番大事なのは初等教育だと思っています。なぜなら、小さい頃に勉強って楽しいと思えたら、その後の学びも自然と続いていくんじゃないかなと思っています。私自身は、アメリカに50年以上住み、子どもたちもアメリカで生まれて、こちらの教育を受けているのを見てきました。そのため、アメリカの初等教育については、ある程度理解しているつもりです。釣島先生のご著書の43ページに、アメリカの小学校で実践されている多彩な教育について触れられています。その一例として、Show&Tellの話があったり、これは実践的な学びの一つだと思います。皆さんの中でも、小学校の教育を経験された方がいらっしゃると思うので、体験などをぜひシェアしていただきたいと思っています。時間の関係上、JABIのイベントでMCを手伝っていただいている池田心彩（ミア）さん、たぶん今日このフォーラムでの最年少だと思います。高校生ですね。15歳かな。あなたの体験、日本、シンガポール、アメリカの教育を受けられていると思うのですが、何か感じたことがあれば、シェアしてもらえますでしょうか。

池田：はい。こんにちは、池田心彩です。高校2年生、こちらでは高校3年生ですね。私が印象に残っているのは、日本では結構規律が厳しく、すごいマナーとかを重要視し、個人の印象が強いんです。私的には、シンガポールでは日本人学校に行っていたので、たぶん同じ感覚なんですけど、やっぱり一つ違うと思ったことは、シンガポールだと結構周りの人が外国人なので、その人たちのことを学ぶのが重要視されていました。アメリカだとやっぱり一番重要とされているのは自由なんです。個人表現の自由とか、髪の色とか、化粧とか、そういうのは全然、こっちだと自由で、そういうふうに、むしろ先生とかから注意される方が、こっち的には違うんじゃないかなという感覚が多くて。しかも生徒と教授の言葉喧嘩もしょっちゅうあって、それは褒められています。その上、例えば、生徒と先生の間で意見を言い合うことも大変重要とされているんですけど、先生が間違えたときに生徒が指摘するのも結構重視されていて、リスペクトされている感じがして、関係が作られるんですよ。その関係で、私も先生とかと冗談言い合ったり、すごいトラスト、信頼関係が作られている感じで、私はアメリカでそれは重要だなと思っています。一番びっくりしたのは、アメリカと日本の昼食が違うことにびっくりしています。アメリカだと結構栄養が偏りがちになる昼食が多くて、例えばもうピザが毎週とか、栄養バランスがなくなっちゃうんですよ。でもやっぱり日本だと昼食は

結構、栄養がバランス化されている感じがあって、氣遣ってもらっている感じがある。結構日本のプリンとかがすごい恋しく思います、私的に。ありがとうございます。

司会： ありがとうございます。忙しい中、ありがとうございます。他に、例えばアメリカでの show&tell、子供が自分の好きなものを見せて他の子供に説明するというような感じの場面を経験した方いらっしゃいますでしょうか。本人もしくはお子様の教育場面でとか、どなたかいらっしゃいますか。結構このあたりはね、すごくアメリカの、今の皆さんのように発言の上手というか、プレゼンが上手。例えば家から好きなものを持ってきなさいと、持ってきてそれについて話をしなさいと。ですから、ストーリー性を持ってみんなに話をするというのが、幼稚園の頃から教育されるわけですよね。日本の場合、結構話すのが恥ずかしいというのか、あまりしゃべらないのが美的であるとかね、いろんな考えがあると思うんですけども、そのあたりすごく大きな違いがあると思うんです。他の方で何か意見ありますでしょうか。どうぞ体験で。

釣島： 僕も孫 3 人いるんですけども、とにかくよくしゃべるしね、とても積極的なんですよ。例えばね、小学生のときからまずパソコンをどんどんやってね、うちへ帰ってきたらね、勝手に僕の ID を変えたりしたりね、中学生ぐらいか YouTube の胴元になってね、とにかくアメリカでは積極的で、今 Show & Tell っていうのはだいたいぬいぐるみなんか持ってきてどうしてそのぬぐるみが好きになったかをみんなの前で説明やるんだけどね、積極性が違いますね、孫を見てたら日本の子供とは全然違っているね。

池田： 一つ言わせてもらおうと、日本だとすごい一発勝負な感じが強いんですよ。なんか、小学生の後、その後一発勝負で中学校と大学がつながってる感じで。やっぱりこっちだと、グレードとエクストラクリキュラー（成績優秀）っていう他のテニスとかインターンシップとかやってるのを全部見られて、大学に入るんですよ。だからやっぱり一つ大きな違いだなんていう教育で思うのは、日本だとすごい勉強熱心で、そこを重要視大切にするんですけど、アメリカだとグレードとか、そういうのも重要視するんですけど、GPA（成績指標値）っていうのがあって、その上に他に何やってるのか、あなたはどういう人なのかっていうのも重要視されて、大学はそれを全部見て、その中で一番いいキャンディネット、候補者をスタンフォードとか IV リーグで取るって言われています。

司会： ありがとうございます。皆さんすごくインターンシップをいろいろ頑張っています。経験していった、経験が実になっていくと思います。ここで、すいません。ミッキーさんよろしく。

ミッキー： 私自身は大学卒業まで日本にいました。大学院から来てるんですけども、小学生から中学生、高校生、大学生に対して家庭教師をしたり、それから集中講義を受けたりして、いろいろ感じることは、日本って正解を教えてほしい。そして正解を覚えるという教育の仕方をずっと小学校から高校までやってきてるんじゃないかなという気がします。一方で、アメリカで育っている子どもたちというのは、自分の意見を言う。それが正解か間違っているのかということは横に置いておいて、とりあえず自分の考えを述べるということが奨励されていて、そして、それがいいか悪いかというのはみんなで議論をして、もっと別な考え方があるとか、それからグッドイナフなのか、ベターなのか、マッチベターなのかという議論があったとしても、それがダメというダメ出しはしない。だからこそ、自分の意見が言えるし、それからディスカッションをしても自分の意見が言えて多様性が尊重されるのだと思うんですね。ところが、日本の教育というのは正解を覚える。なので、誰も手を挙げないのは、先生から正解を教えてもらって、それを覚えればいいと思っている子どもたちが多からではないかなという気がします。それが延長して、大学とか大学院の授業です。私、今、この年になって改めて日本の大学に通い始めて、自分の UCSF にいたときの大学院時代と日本の国立大学の大学院とこんなに違うのかと思いました。残念なのは、アメリカの大学って課題が出て、それを例えば教科書を何ページから何ページまで読んでいて、授業中はその課題に対して議論をするというのがメインだと思うんですね。一方で日本は大学に入ってもまだ授業中は先生から何かを教えてもらうという姿勢

なので、授業が終わって、じゃあ課題をやってきてくださいみたいな感じで、全然自主的に自分の意見を発表するとか、ディスカッションをするみたいな、全然構築されないというか、建築性がないというか、建設力がないという感じなんですね。だから個人的には、正解を求めるとか、正解を覚えてほしい、お行儀よくしてほしい、みたいなのはやめた方がいいんじゃないかなとずっと思っています。長くなりました。

司会：このセッションですけども、時間の分配はあと 10 分ぐらいなので、急ぎ足で行きたいと思います。今の話で言いますと、アメリカの大学の違いのところですね、本に書かれていたのが、46 ページ、103 ページに、アメリカの場合、コミュニティカレッジ（短大）があってですね、そこから UC（州立大学）とかに変わるとか、それは大きな違いかなと思います。それから、アメリカの寄付の仕方が、大学の寄付っていうのも規模が全然違うというところで、アメリカの私立大学がすごく大きいっていうのは、そういうところなのかなと。そこでですね、今現在、アメリカに留学、体験している方の意見を少し聞きたいなと思います。JABI のインターンのリーチ君、いかがでしょうか。

大橋：はい、こんにちは。JABI でインターンをしています。大橋理一と申します。よろしくお願いします。僕は今コミュニティカレッジに通っていて、今 2 年生で、今年の秋から UC（州立大学）のどっかの大学に編入するっていう感じで、今結果待ちっていう状況です。いろんな国から、特にアジアからが多いですけど、留学生が来てコミュニティカレッジに行って、2 年過ごしてから編入して、また 2 年過ごして卒業するというルートも、比較的ポピュラーというか、結構あり得る進路になってます。コミュニティカレッジの授業は、やっぱり大学の授業と比べると、難易度とか質とかは少し落ちる場合もあるとは思っていて、どちらかというとディスカッション多めというよりは、基本的な知識を教えてもらったり、いろんな分野のジェネラルエデュケーション、日本語で言うと一般教養みたいな授業をとっていくっていうふうにはなってます。あとは課外活動とかもしながら、成績もキープして、UC（州立大学）の出願に向けて 2 年間頑張っていくっていう感じで、課外活動は結構盛んなところもあって、例えばビジネス系のクラブで、ビジネスプランコンテストとかに出て優勝狙ったりとか。あとは僕の場合だと、ちょっと特殊かもしれないですけど、僕はアニメクラブを大学で立ち上げました。僕がいるサンノゼ市ってエリア、カリフォルニア全体に言えるかもしれないですけど、アジア人は多かったり、アジアの文化にすごい馴染んでる人が多くて、アニメオタクがすごく多くて、正直日本の、例えば新宿で適当にインタビューしたときと、ここで適当にインタビューした時だったらこっちの方が多いと思うほど、アニメファンが多いんじゃないかってぐらいのエネルギーを持っていて、そういうのもあって、僕も日本人として何か提供できるものがないかなと思って、アニメクラブとかをやったりしています。なので、UC（州立大学）編入に向けていろんな会活動をしながら、成績を維持しつつ進路を決めていくというような感じになります。ありがとうございます。

司会：先ほどですね、私の方から、勉強を面白く感じるための初等教育が大事だという話をいたしましたけども、勉強が主旨であっても、日本の教育、その受験制度というのと、やっぱり知識、大学に入るための勉強と 教えたこと、学ぶべきことを学ぶというところで、日本の教育とアメリカはちょっと違うと思うんですけども、次のテーマが、グローバルな舞台でのコミュニケーションを可能とさせる教育ということで、受験制度について誰かお話していただけないかなと。

釣島：これが問題なんです。日本が何であかんかという、受験制度なのよ。受験制度というのは、18 歳のごく一時期の知識の経過だけで決める。これが根本的な間違い。人間というのはそういう知識だけじゃないんです。それよりも人格とか、これもあともうちょっと、一番問題なのは、この環境を破らない限りでダメですね。アメリカの評価はね、例えばうちの孫なんかでもそんな勉強できないんだけど、もっと多様面で、面接もする。ボランティアでなら人格そのものでしょう。社会に出て、頭がなんぼ良かっても、これからもう AI の時代だから、そんな知識

詰め込みをやってもしょうがないんですよ。それよりも、危機に直面したときにどう対処するか？あるいは人間的にどういふことがあるか、そういう評価をしない。今のこの根本の間違ひは、僕は受験制度だと思います。これを日本でも AI とかをアメリカで学んで、うちの大学、太成学院大学でやっている。それは全然アメリカのやり方と違うんです。うちの学校のことを言ったら、入るために優しく、アメリカと区別するためでしょ。だからこの受験制度こそをやめないと、これはもう日本ではダメですね。

司会：ありがとうございます。釣島先生の本の中にたくさん書かれているので、よく分かります。そういうことで、今日のアジェンダなのですね。他の話をするにあたって、すごく大事なところだと思うんで、ここでちょっとキャリアレーション、反復したいなと思うんで、先生が今言われたことと重複するかと思うんですけども、2 日ほど前も、日本から来られた高校生や大学生の人たちと話す機会があって、少し話していると、やはり将来何をやりたいかというチャンスがあまりないと思うんですよ。どうしてかという、親からですね、良い仕事をする、就職するためには良い大学に行きなさい。良い大学に行くためには良い高校に行きなさいと言う。日本の受験のための勉強というのは、先ほどから話が出てきましたけども、知識、ミッキーさんが言うところのソリューションを勉強し、教えてもらおうと。そうじゃなくて、考え方を教える、勉強の仕方を学ぶと、そういうところがすごく大事だと思うんです。アメリカで実際にそういうことを感じたという人、もしくは現役の学生さんの意見をちょっと聞きたいなと思うんですけども、いかがでしょうか。私の経験から言うんですけど、アメリカでの大きな違ひは、日本の場合は受験勉強しましたと。した後、もう疲れて大学 4 年間遊んでいますと。アメリカは逆で、入るのは簡単ですけども、出るのが難しいので、もうずっと 4 年間宿題宿題宿題なんですよ。トムさん、アメリカの大学を経験していますけど、いかがでしょう。

トム：そうですね、大学受験ってほぼなくて、TOEFL 受かって入りましたって感じで。成績見てですね、たまたま高校、ちょっとレベルの低いボーディングスクール、全寮制のエリート校だったんで、全部 A だったんで、それでなんかいけましたね。だから受験勉強もしてないし、ちゃんと普通に勉強して成績良かったら入れるって感じでしたね。あとは大学入ると電気工学だったんで、もう宿題の嵐で。数学なんでね、結構宿題はしんどかったですね。だからリベラルアーツのクラスをたくさんとれるような、学部文化系の人是非常に羨ましかったですね。そっちのほうの勉強は、試験前にちょっと本読んで 1 日 2 日勉強したらいけるじゃないですか。工学部はそういうわけにはいかなくて、ずっと勉強しなアカンみたいな感じだったんで。そういう意味では、よく勉強したなと思うんですね。なんで僕こんな勉強するんやろっていうか、しましたね。まあそれはそれでね、勉強するのも楽しかったですし、学ぶのも楽しかったし、あとは工学部の先輩の方々みんな友達になって、そのうち最後のほうが楽だったですね。みんな仲間になって、前のテストとか全部くれたんで、研究と対策っていうんですかね、ソーシャルにバックしてたって感じでしたけど最後は。でもそういう意味では、アメリカはきちっと勉強するっていうのはいいと思います。大学卒業した時点で結構知識はついてる。その知識も別に今だとバンバン変わるんで、今勉強して学んだからつたら 5 年後は多分意味ないんですよ。だから何を学ぶかっていうと物の考え方ですよ。工学部では特に数学物理なんで、ロジカルに物を考えると、問題解決するときどういう物を考えるかっていう訓練を先導するっていうふうに思いますね。なのでそういった意味で、僕は理系っていうかなと思います。でもこの訓練って別の分野でもできるし、なので大学で学ぶことその知識だけが大事だっていう世界は終わったんで、先ほど釣島先生がおっしゃったみたいなので物の考え方っていうのを学ぶとか、他の人と一緒に勉強したりとか、ネットワークするっていうことを覚えたりとかっていうのが大事かなというふうに思いますね。

司会：はい、ありがとうございます。ここ本当に大事なところだと思うので、教育をこれからどうするべきかっていうところで、ここをちょっと何とかしてほしいなと私は思うんです。

トム岡田：僕もこんなこと言ったら怒られると思うんですけど、文科省に変えてくれとか日本の義務教育変わら

なあかん。それやるんやったら選挙制度も変えて、若い人もどんどん選挙してもらって政治家変えてやらなあかんから、そんなのできないですよ。だからもう若い人でできる人はもう海外行けっていうしかないと思うんですね。で、戻って日本戻って何とかしてくださいと。日本の教育は変えられると思うのはもう無理だと思うんですね。

司会：はい、ありがとうございます。そんなに簡単にギブアップするのやめましょう。では次のセッション、2 つ目のセッションですけども、グローバルな舞台でのコミュニケーションを可能とさせる教育ということで、グローバルという意味で英語ですね。英語教育が絡んでくるわけなんですけども、英語教育にあまり特化しなくてもいいんですけども、体験談ということで、明石さんの方からどうぞ。

明石：ありがとうございます。関西学院大学国際学部の明石寿珠花と申します。本日は定藤先生からご連絡いただいて、私の留学生活から感じた日本と海外の教育の違いをお話させていただきます。よろしくお願いいたします。高校時代に1年間アイスランドに行きました。大学時代はドイツへ留学していました。ドイツに来て感じた一番大きな教育の違いというのは、教育システムそもそもそのもの自体が違うなと感じています。教育の場の捉え方というか、先ほどのセッションとお話とつながるのですが、そもそもドイツでは特に大学では自分の専門をしっかり持って学びに来ているという方が多いように感じました。ドイツでは小学校や中学生の頃から、常に自分の専門を選択して進む進学の道が分かれていく国ですので、小学生の頃から将来のこと、社会に出たときのこと、卒業を意識して自分がこれから何を学んでいくかということを既に考え始めているということに衝撃を受けました。先ほどおっしゃっていたように、日本では大学に入ると正直、自己紹介するときも、所属は言うんですけど、私の場合は国際学部に所属していますというだけであって、あくまでもそれはポジションだけで、そこで何を学んでいるかというのは正直、そこまで話題が広がることもなくていいのです。本音を言えば大学4年間通って、学ぶ場であるのに遊んでいる時間の方が長いというか、就活が始まるときに自分は将来何をしよう、今まで学んできたことが生かされて社会に出るわけではないというのが現状です。一方ドイツでは常に幼い頃から自分の将来をどのような道に進むか考え始めているので、自己紹介するとき自分はその学科に所属していて、今何を学んでいますというところまで自己紹介に含まれる。私も国際学部と、大雑把な学部であって、そこで自分の中で何を探索していかなくてはならないかの考えなくてはならないと感じています。自己紹介に少し戸惑いを感じてしまうほどです。ドイツでは、先ほどミッキーさんもおっしゃっていたのですが、大学は働きながらも就学して学べる場であって、若者に交じって多くの社会人が学ぶ場であるんです。そもそも大学という場所が日本とドイツは完全に違うなと感じています。

アイスランドで一番大きく感じた違いは、政治の教育に関してです。私は高校生のときに、アイスランドの学校に行ったのですが、アイスランドでは政治家の方が直接高校に来校されて、自分の政党についてお話ししたり、ポスターに自分の政党について紹介していて、政治家の方が高校生に向けて自分たちを売り込みに行くという形で、選挙活動をそもそも若者に向けているということがすごく大きな印象でした。日本では私が高校生のときに、ちょうど選挙の時期で、外を歩いていると18歳で選挙権を持っても政治家の方がフライヤーを配られているのですが、制服を着ているだけで後ろの大人の方にだけ配られて私には配ってくれなかったということがありました。次の選挙に行こうと思っていたのに、こちらを相手にされていないような印象を日本では受けておりました。アイスランドも18歳から選挙権があるのですが、対象はやはり日本では大人と言いますか、先輩の方と言いますか、高校生で選挙権を持っても、自分は選挙制度に制限があるように感じてしまうのが日本での現状だと思います。アイスランドでは選挙制度、選挙の教育に関して大きく違うところだなと感じています。

司会：次にちょっとお話し聞きたいのが、JABIではコロナ前から5UPというシリコンバレー研修をやっておりましてですね。日本の大学生向けに提供しています。5UPの要素とは、講義があって、メンタリングがあり、企業訪問が

あり、交流ビジネスプランがあるんです。このプログラムでは、アイデア創出、ビジネスプランを作るとかを目的でやっております、特に面白いのが参加する学生の多くが、他のシリコンバレー研修とは違ってですね、別にビジネス専攻だとか、起業をするというそういう目的でもなく、理系や文系、様々なバックグラウンドを持っている人たちが参加しております。今日はこの 5UP プログラムのコアメンバーのテッド友永さんのお話も本に書かれているので、テッドさんからちょっと 5 分ばかりお話していただけますか。

テッド友永：シリコンバレー研修 5UP の中の一つに企業訪問があり、ベンチャーの会社だけでなく、アクセラレーター、大学などトータルでシリコンバレーのエコシステムを見学する。それから、重要なことは、メンタリング、ビジネスプランの構築です。学生の大体 2 割ぐらいはスタートアップを考えているけど、ほとんどの人は考えてないですね。いわゆる社会のペインをどんなところを感じて、それをどうやって解決していくか。架空のビジネスプランの構築で、とにかく奇抜なアイデアを出してもらう。それを学生さんにやっていただくので、今までにやったことのない体験をしたというのが非常に好評です。これが他のシリコンバレー研修と全く違うところで、例えば、経済産業省の始動（??）とか、神奈川県や神戸市など、いろいろシリコンバレー研修が行われていますが、ビジネスプランをピッチさせて、それで派遣者を選抜して、シリコンバレーでブラッシュアップしていくのが普通の研修です。だけど、JABI のはそうではなくて、ゼロからスタートさせています。特に私が一番やろうとしているのは、日本の教育というのは固定概念という、いわゆる日本の常識の中でいろいろなものを考えるので、とにかくシリコンバレーに来たら、固定概念を外すところからスタートします。そのためにキンバリーさんというアクティブな女性が、例えば一週間、少しずつ頭をほぐすトレーニングをしていく。日本の学生さんは、大体周りを見てお父さんお母さんが喜ぶだろうなという会社、大企業に就職する。だけど本当にあなたは何かしたいのかということを、シリコンバレーに来て問い詰める。そうすると、本当にお父さんお母さんのことは考えずに、「私のやりたいことをやっていいの?」というようなところまでやっています。日本の昔は、会社に入ったらずっと一生そこで過ごせたけれど、どんどん会社が倒産などする中で、会社の年齢というのは 30 年と言われているので、研修では、その時に何するか。自分の持っているアセットを次の会社へ行かせるような、自分磨きをしないとけない。会社に入ってから。だからお父さんお母さんや周りの人が喜んでくれるというのではなく、自分が何をしたいかという軸を持っていないと将来、自分が転職するとき、人生設計するときに困るだろうというので、そういう今までの固定概念を外します。それから周りを見ずに自分が何をしたいのかというのを見つけることを特にやっています。あと一つ、今問題なのは、日本の円安、それからシリコンバレー、アメリカの物価高で日本から来ていただくプログラムの検討段階で止まっているんです。公共団体などから助成金をもらえればいいのだけでも、大学独自でやろうとしたら、なかなか難しい。今、金沢大学の先生や、神戸ベンチャー研究会の先生からもオファーをいただいているんですけども、やっぱり費用面で問題があります。この前も費用の問題で、今日もイベントに参加していただいている黒田さんなんかは、お金はいらないからサポートしますよと。そういうような形で日本の活性化に役立ちたい人はシリコンバレーにいくらでもいます。シリコンバレーに来たらサポートできますので、よろしくお願いします。

司会：はい、ありがとうございます。では、実際に参加された方からご発言を。今日、フォーラムに参加されていますので、松田さんいらっしゃいますか。松田さんは参加されたのは 2 年前ですかね。あなたが体験した、先ほどテッドさんが言われたことの、どこまで本当に自分で体験できたのか、ちょっとお話し聞かせてください。

松田：はい、2 年前、8 名のグループでした。いろんな企業に行って、どんな人が働いているのかとか、どういう環境で働いているのかっていうのを、実際に見るのができたのはやっぱりすごい刺激になりました。企業とは思えないような、ファンタジーな施設に思えるような企業さんが結構あったりもして、なんか面白かったなっていうのが印象的でした。あとやっぱりビジネスプランっていうのが、一番印象には残っていて、1 年前の JABI のプログラムに

も参加させていただいて、2 回そのビジネスプランについては、考えて発表するっていう経験をさせていただいたのですが、やっぱりまず、世界とか社会とか、そういうことをちゃんと知っておかないと、どういうビジネスをしていくかっていうのを、自分で考えてアイデアを出していくっていうのは難しいなっていうのが一番の壁でした。それを他のメンバーの意見と組み合わせて、より良いものにしていくっていうのも、さらにちょっと難しかったりとかして、1 回目のビジネスプランのときは、夜中まで先輩の方と Zoom をつないで、ビジネスプランを練って練って、パワーポイントにして発表方法も考えてっていう風に、難しい中でもまとまって、なんとか発表できたっていうのがありました。しかし、2 回目の方は、一緒にパートナーになった人とのやり取りっていうのがうまくできなくて、ビジネスをしていく上で、同じ方向を向いてやっていくっていう周りの人集めとかも大変なんだなって、ビジネスをしていく上での周りの環境づくりっていうのも難しいんだなっていうのが、ビジネスプランの発表とかを通して知ることができました。今の自分に活かされたかどうかは分からないんですけども、自分が何をしたいのかとか、何が好きなのかとか、そういうものを探そうと、大学最後の 1 年間でたくさん挑戦する機会をくれた、JABI の研修に参加できてよかったなと思っています。以上です。

司会：ありがとうございます。今、松田かずみさんが言った話の中で、先ほどのテッドさんの言っていた他と違うという、もう一つのところが、今話に出てきましたけれども、パートナーとの話というのがありましたよね。通常のシリコンバレーのそういった企業の研修というのは、本当に自分一人なんですよ。自分のアイデアをいかに出すか、ビジネスプランを書いてというところなんですよけれども、JABI のファイブアップでは、それを敢えてですね、最初はそうなんですよけれども、その後でつづすと言うとおかしいですけども、やっぱり実際のビジネスって一人でやるんじゃなく、コラボレーションといいますかね、今のスピードで言えば新しいアイデアを作って、創造効果を狙って早く進むということは、他の人の意見というか、似たアイデアを持っているというか、逆に相反する人と一緒にものを考えて、より良いものを作っていくと。そんな作業もやりました。そこがまたもう一つの大きな違いです。ありがとうございます。

次のセッション 3、ビジネスプランの提案など、起業家となるために必要な実践的教育ということで、このテーマに関しては、本のチャプターで言うと、ページ 109 ですかね。日本のビジネススクールの役割ということで、関西ベンチャー学会の前会長である定藤さんに、関西学院大学のビジネススクールの取り組みについて、簡単にお話しいただいて、ビジネススクールに参加されていた方がいらっしゃるのであれば、お話を聞きたいなと思います。よろしくお願いたします。

定藤：日本のビジネススクールは専門職大学院という名称で 2005 年くらいから、開設されています。日本で最初のビジネススクールは、1962 年に 慶応大学がハーバードビジネススクールと提携して設立しました。現在、関西では関学のほかに神戸大学、同志社大学、立命館大学、名古屋商科大学など数校あります。アメリカのビジネススクールを手本にしているのが実態かなと思います。基本的には実践と理論を融合させながらやっています。学部教育と一番違うのは、社会人経験 3 年以上の方しか入学できませんので、まさに教員側から課題を出して、予習して勉強してきてもらってきて、それについて討議する形式です。そういう意味合いでは、アメリカの大学がやっているような形で、授業は進められています。ビジネス教育という面では、大学生を教えるよりもはるかにやりやすいです。イノベーションですとか、経営戦略、組織論、テクノロジーマネジメント、ファイナンスなど経営に関するあらゆる課題を取り扱っています。またビジネスプランを書かせることなどもやっています。社会経験があるので、かなり現実的なビジネスプランを書けますので、教える側も学ぶべきことが多い訳です。ただ、アメリカではビジネススクールを修了すると、管理職になるのにも有利になりますが、日本の場合はビジネススクールを修了しても、あまり評価されないのですよね。ビジネススクールの一番の特徴は、いろんな業界の方が学びに来られて、

ネットワークが非常に広がることです。それで、ご自身の会社生活・ビジネスにおいても、いろんな見方ができるとか、情報交換できるという、そういう意味合いでは非常にいい効果があると思います。起業される方もぼちぼち出てきているかなという感じです。

京都大学のビジネススクールの学生の構成は特色があって、留学生 3 分の 1、社会人 3 分の 1、学部から上がってくる学生 3 分の 1 くらいです。中には起業される方がいるようにも聞いています。アメリカにはエグゼクティブ MBA（ビジネススクール）がありますが、船で 1 ヶ月間とか、各国を回りながら研修されて、その間に人間関係を作れる、ネットワークを作れる。そのような経営者だけを対象にしたプログラムがありますが、日本ではまだ普及していません。

司会：今日参加されている方で、関西学院大学のビジネススクールを受講された方っていらっしゃいますか。

仲川：仲川です。40 年間会社勤めをした後で、2 年間、関学の IBA のビジネススクールに行きました。1 クラス、15 名の少数精鋭でのクラスでした。40 年間の会社勤めの中で、私の場合は日本だけではなくてアメリカ、中国、ドイツと、3 大陸で仕事をする機会がありましたが、それでもやはり一つの会社なので、同じカルチャーでずっとやっていたような気がします。振り返ってみると、関学の IBA での 2 年間は、いろんな職種の方、一番極端な例で言うと、外科医の先生もいらっしゃいましたが、30 歳前後の方から、私に近い 60 くらいの人までの年代の方で、本当にダイバーシティってこんなことなんだってということが、よく分かりました。一つの見方だけではなくて、いろんな見方をすると、素晴らしい結論を導き出せるということに学びました。卒業後、幸いにも、関学 IBA で非常勤講師として教える機会も頂戴しまして、教えるということはやはり、勉強しないと教えられないので、本当に生涯学習で学びながら教えていくということ、それからやはり先ほど定藤先生がおっしゃったように、ネットワークですね。昨日も夜遅く、指導教官だった 2 人の先生方と、あともう 1 人クラスメイトと、それ以外の方 2 人で、大阪の中小企業診断協会内のプロジェクトで、大阪府に対する政策提言をこれからしていくために、何度かオンラインで打ち合わせしながら、提言までまとめていくということに取り組んでいます。それもその IBA の先生と卒業生とのネットワークで、中心になって動いているので、やはりそのネットワークが貴重であり、加えてダイバーシティがビジネススクールで一番学んだことだったと思います。

司会：他に今の話で質問とかございますでしょうか。

大野（長八）：私は神戸大学の大学院と、大阪府立大学の大学院のビジネススクールで教えていたんですけど、誰一人とも起業する人はいません。社会を変えようと思う人はいない。それは先生が間違ってたんですよ。僕らの時代もそうだったけど、情報があまりにも少ない。教師側に情報がないから、何言っても答えられないんですよ。僕は、20 歳の時にアメリカ人から、アメリカにマッキンゼーというナンバーワンのコンサルタント会社があるということを聞いて、すぐにニューヨークにあるその会社の手紙を書いたんですね。そういう国際的なコンサルティング会社があるってことさえ、同志社の教師は誰も知りませんでした。それくらい情報はなかったんです。だから僕らみたいにベンチャー、コンサルティング会社に就職して、ベンチャーを 9 年行ってきましたけど、そういうのは、日本での邪道なんです。日本人って農村社会、農民社会だから、飛び跳ねたり、掘り上げたりできない。要するに異端児を、容認しないぐらい心が広くない。関学さんにはマザーズに上場している起業家が 20 名近くいます。これは関学さんの親が経営者として成功している人が多いからです。そもそもベンチャー教える大学教員が、会社を作ったことがない人が教えている。スタンフォードとかが違うのは、成功した人が教授をやっているから、成功しているんです。あるいはテキサス州自治体のオースティン校もそうですよね。メンターが優秀で、その人たちが上場を何回も経験しているから、指導できるんです。

司会：4 つ目のセッションの 時間になりましたので、そちらのほうに 行きたいなと思います。最後のセッションは、

感性を磨き、想像力、問題解決力や、総合的な人間力を身につけるためのアーツ、リベラルアーツ教育、というところがテーマになります。私は学者ではありませんけどもね、個人的には、人間形成において、芸術はとても重要な役割を果たすと考えています。アートには、想像性や情熱、リスクを取る精神、イノベーションとかですね、ベンチャー企業家に必要な質と重なる部分が多くあるんですよね。ですから、その感性を育てるためには、単なる知識の勉強じゃなく、心の安定だとか、いろんな関連している要素というか、それをやっぱり小さい時、小学生、幼稚園の頃から見ていて、教えていかなければいけないんじゃないかなと思ってます。ちなみに私が尊敬する人物はですね、右脳と左脳のバランスが非常に優れていたと思うんですけども、レオナルド・ダ・ヴィンチのような、科学と芸術、両方の面が持てる人、これから AI の時代になってですね、もっとそういう人たちが必要になってくるんじゃないかなと、勝手に思っております。少し話が長くなりましたけども、釣島先生のご本の中で、心に響いたセクションがありましてね、「日本の復活は文化都市を先導する京都から」という章ですけども、そこに書かれている言葉で、「危機の時、未来を展望し、人を育てる、そして文化芸術を振興させ、産業を活性させ、都市基盤を作る」と。長期の考えが京都にはあるのかなと、この文章を読んで思ったのですけれども、京都は歴史ある文化都市ですが、未来に対してどのように現在取り組んでいるのかなと、というところのお話を皆さんからお伺いしたいなと思います。今日参加されている中で、京都の方はね、トムさんもそうですし、あと代表関係で言いますと、千菊さん、アメリカからセンギクさん、いらっしゃいますか。スタンフォードのバックグラウンドも絡めてですね、京都のこのテーマ、文化というところでの京都の位置づけであったり、京都が今、どういう方向で未来をつくっていくとしているのかということをご存知であればお話しください。

千菊：千菊（センギク）たけしと 言います。大学職員やってます。専門事務職、常勤という形で、おそらく日本の大学にはあまりないポジションじゃないかなと思います。専門は外国語教育とテクノロジーで、教員のトレーニングを行ったり、学生をサポートしたり、たまに 僕みたいな職種が集まって学会発表したり、先生が論文を執筆する時にテクノロジーのフレームワークを強調したりという職務です。この話をするとだいたい、誰に言ってもそれは 何なんだっていう。教員ですかって言われて、いやいや職員ですっていう、そういう 仕事をしています。カリフォルニアで 仕事をして 10 年ぐらいです。もともと日本の大学は 1 年行きて、その後アメリカの大学に行って大学院に進学して就職活動したのですけれど、失敗して日本にちょこっと帰っている間にまたアメリカに応募して、今こっちにきています。京都を好きになったのは、ある意味アメリカに来てからですね。アメリカに来て、アメリカ人に京都を説明するときにもものすごく勉強しなければならなかったんで、そこから京都はすごいいい町だなと。京都の特性は何でしょうね、もともと俗に言われる起業家精神があるのだと思います。どんなチツチャイ店の方でも、皆さん言うのは長いことを続けるためには、戦い続けなければならないと。だから常に新しいことに挑戦しないと先はないというのをずっと考えられておられる。オタク集団でも、会社を作って失敗して、ノーベル賞を取るみたいな。そうした会社の風土があるからこそかなというのは、外から見てて思いますね。だから、先ほど ビジネススクールのときに言われたのが 今まで異端とか異能とか、京都の場合はある程度 そういう異端児を受け入れるところがあるのかなというのが、僕の感覚ですかね。今回 シリコンバレー研修プログラムに来られた大学生の方とお話することがあって、東京・神戸・長崎の高校生から大学生まで 3 人 4 人おられたんですけども、起業家コースとかプログラムとかの研修の感想を聞いてみたんです。やはり本人たちが異端に思われてしまうのではないかと。その子たちはすごい頑張ってシリコンバレーまで来て、これは客員研究員の方にも言えますけれども、シリコンバレー充電っていうのは 1 人だけだったらどんどん減ってって 大体 3 ヶ月か半年ぐらいでバテしてしまうので そこを何とか充電できるような場所があればなと。教育のことで 一つだけ言わせてもらおうと交換留学がやらない理由としての一つも、自分が留学してる間にみんな就職活動してしまうので その辺でやっぱり 自分が異端になってしまうっていうのが大

変っばいですね。だから社会がそういったものごとを受け入れられるかどうかこれからかかるのかなという気はします。以上です ありがとうございます。

司会：今の話で 絡めて展開して お話したい方いらっしゃいますか。

釣島：ごめんね 僕ばかり喋って申し訳ないんだけど これが一番重要なんです。教育と言うでしょ。教育という言葉は「教える」と「育てる」と2つの漢字から成り立っている。その日本の教育は 80%は「教」で、20%は「育」です。教育という言葉の教は 知識を教えるということですね。知識集約ということが言われてきたが、現在のそれが AI の時代になってきたから、知識は検索すれば直ぐに解明される。だから 逆転しないといけない。それは教が 20%で 育が 80%にすべきである。その育は何かってといえば 今トム岡田さんとか皆さんいいこと言ってくれたじゃないですか。それは人格やものの考え方を陶冶する意味だと思う。また教は知識を、育は知恵を意味すると思う。知恵というのは何かというと、例えば大野さんのおっしゃった修羅場になった時にどうするかですよ。例えば貴方を殺すと暴漢に襲われた時にどう対処するかである。それができるかは小学校の時代からの訓練だが、大学生になってもその時にフリーズしてしまうので動けなくなる。それを突破するには 1. 大声を出して叫ぶ、2. 瞬時に逃げる、3. 相手に立ち向かって行ける力が知恵ですよ。そういう生き方、人間性の考え方、そういうことができるかどうか知恵です。何が重要かという、ものの考え方、判断の仕方です。今のトランプの 悪口言わけじゃないんだけど、彼の判断の基準は「損得」や 勝ち負けで判断する。トランプさんとかに抜けているのは善悪の基準が抜けていることですね。例えば、プーチンを見てください。人を殺しても 何にも悪いと思ってないでしょ。トランプさん得するか損するかだけで判断し、その前に善悪でまず判断する必要があることを教えてない。このことを学校で教える必要があるがそれが抜けており、ロシア国民や一般の人達でもそんなのは悪ではない、と皆がそうやってきているのはとても残念だ。釣島が考える善悪と善悪とプーチンさんの考える善悪は非常に偏見している。これに対して我々の物事の判断基準として松下幸之助さんは面白いことを言われている。それはそのことが「天地自然の理（ことわり）」からみて問題がないか判断せよと言っておられる。それが 天地に恥じないというか、そういう形で判断できるような考え方、これはなかなか難しいんですけども。今の損得あるいは勝ち負けではなく、世の中の生き方とか、人格の陶冶の仕方、物の考え方、昔はそういうこと教えてくれる先生がいたが、今は残念ながらあんまりいないですね。そういう点で元京都市長の 門川さんが提唱しておられる日本文化の回復も非常に重要である。また残念ながら経済面では 日本は現在 AI とか最先端技術では先進のアメリカや中国にあまりにも、負けすぎて追いつくことが無理になってきた。半導体だけ何とか追いつこうとしているが分からない状態である。それでこれからは日本としての考え方を 180 度変えて復活の戦略は先端産業の直球ビジネスでなく、変化球としての、例えば 観光とかアニメ、アニメすごいでしょ。日本食など日本の良さをアピールする文化面からのビジネスを復活の処方箋とすべきである。そういうことを念頭に 教育の教を 20%、育を 80%にして教えることに変えていかないといけない。以上です ありがとうございます。偉そうなことを言って申し訳ありませんでした。

大野（秀雄）：教育のことですが、留学制枠制度は 25 年前くらいからやっていたんです。それを今の日本社会はどう評価しているのか、非常に気になる。身近なことで言いますと 私の娘が中学時代には ジュニアキャンプで東南アジアに行きまして、高校時代には交換留学生でした。受験勉強はゼロで英語のスピーチとレジリエーション合格してという形でした。兄弟はいますけど、全然違う人間だった。就職活動も、自分がこれをやると決めたらそれ一本だけで、今はミュージカルプロデューサーやってますけれども、25 年間の留学制枠制度の成果を知りたいと思っています。

釣島：僕はね お答えはトム岡田さんの暗記するより本質の理屈や考え方を理解するというのがすごいと思いましたね。

トム岡田：たまたまね、僕はチツチャイ時からエンジニアになりたいと、ずっと思ってた。小学校 2 年生のときにおじいちゃんが鉱石ラジオ作ってくれて、それからハマったみたいで、エンジニアになりたかったんですよ。で、日本の進学校に行ったときに、そのときの数学の先生がものすごく下手くそな教え方で、人格的にも全然ダメで合わなくて、もう数学大嫌いになったんですね。だから僕、たぶん日本におったら文系に入ったと思うんですよ。で、アメリカに留学したと、そのときにいた先生がものすごく、今度は僕のことをすごく patient って言うんですかね、忍耐強くちゃんと教えてくれて、それでもう大好きになって、工学部に行ったっていう経緯があるんです。そのときにやっぱりいろんなサブジェクト、例えば統計学であるとか、それこそ Quantum Mechanics みたいな数字であるとか、いろんなことを学ぶんですけど、そのときにやっぱり頭の使い方って言うんですかね、思ったのは、やっぱり全部暗記するんじゃないくて、フォーミュラなんか全部定理で解いていくわけですよ。だから理屈がわかるんで、理屈がわかると覚えてなくても問題は解けるんですよ。それをずっと訓練されたって思ったんですね。これって、あ、もう仕組みがわかるからフォーミュラとか、そういう方程式でも自分で作れるわけですよ。ああ、こういうことなんや、こういう仕組みなんやっていうのがわかってきたっていうので、なんでも仕組みを考える習慣がつくとか、丸暗記じゃなくて考える習慣がつく。で、仕事を始めてもそうです。エンジニアとして仕事をして、やっぱりそういう論理的に物事をつくってゴールをつけていく。問題が起こっても、そのトライするときにちゃんと科学的に物事を見て、問題解決していくみたいなことを訓練されるんですよ。で、あるとき、やっぱり大学とか大学を卒業していることは何が大事かっていうのを、上司に聞かれまして、まだ 30 歳のはじめぐらいだったけど。なんで大学教育とか教育が大事かと思うかって言われて、僕はロジカルシンキングっていうか問題解決というものの考え方を大学で学んだんで、そういう人ではないとエンジニアはなかなかできないんだと思いますっていう話をしたら、「それやー」と上司に言われたんです。なので、考え方の訓練だと思うんです。だから、さっきからずっと話していますが、小さい頃から、皆さんがね、最初のおっしゃったみたいな学生の頃から自分の意見を言うとか、自分でものを考えてそれを発表するとか、いろんなことをさせるっていうのをやっぱりやらないと大人になってからできないなと思います。あとはさっきから皆さんの話を聞いていると、日本はやっぱり空気を読む風潮なんで、人と違うといじめられる、人と違うと村八分にされる、もう生きていけない。このカルチャーね、たぶんもう 2000 年ぐらいかけて作ったカルチャーなんて直らへんじゃないかな。だから、そういう日本を変えなきゃいけないとか、カルチャーを変えろとか、っていうのはちょっと不毛な気がしますね。で、ただ言えることは、AI がこれからガッツと進んで、自然と変わる。だから今までの考え方で教育されて、それを大企業がその人たちを雇って使うかって言ったら、もうそんな人たちは要らんからね。AI 全部ホワイトカラーなんか無くなるからね。だから自分で自分を持って物を考えて動ける人間しか要らなくなるんですよ。だから我々変えようとせずつとも勝手に変わるんじゃないかって僕は今感じていて、逆に最終的に幸せになる人っていうのは自分の信念を持って物を考えられる人だと思うんですね。だからたまたまトランプとかプーチンとかで弱肉強食でね、負けたやつは弱いから悪いんやっていう世界に戻ってますけど、これずっと続かへんと思うし、また AI が来ると全然また違う世界が来るんで、そこはちょっとこれから考えようかなと思ってます。

ユヴァル・ノア・ハラリさんが『ネクサス』っていう本を書かれて、その内容をラフに見ると「これから人類どうなるのか」って書いてあるんで、これから読もうと思ってるんですけど。あんまり我々が無理して変えようと思わなくても変わらざるを得なくて変わるんじゃないか。終身雇用もなくなるし、それに向けた年金システムも変わるし、必要とされる人材なんかあまりにも変わるので、放っておいても変わるんじゃないか。だから東大生が昔は、法学部に行って、それから官公庁に行ってるね、総務省とか行ってましたけど。それがほとんど今、マッキンゼーとかに行ってるっていうのは、この 10 年でガラッと変わるんじゃないかなって言われたら、ほんまに変わりましたからね。だから、変わるといいますよ。ほんとに。私が言いたかったのは、高校のときの勉強で言うと、なぜこんな行政知識が必要か、経済論

が必要か、統計学が必要か、あのとき、大学生は受験のことしか考えないんですよ。ただ、実社会で感じると、それが企業であるだけであろうか、統計学とか、あれほど大切なのではないですよ。ただ、数えた数えただけだからね。そういう面白みを実感しないまま、教育を受けていくことが、非常に重要です。私はそうですし、非常に不幸の時代がまだ残っているのかなという気がしております。ありがとうございます。

司会： 本当にトム岡田さんの今回の結論が、一番素晴らしいんじゃないかと思いますね。時代がAIでもう変わってきてるんだよ。本質の考え方とか本質的なものが。これを教えるのが教育だと思いますよ。ちょっと時間がかうそろそろ最終に近づいてきたんで、今アメリカにいらっしゃる方で、今日発言していない人？発言していない人。せっかくですからね、やっぱりアメリカと日本という意味では、アメリカに来て、両方見て体験したことを、ちょっと皆さんにシェアしていただけますか。

Teppei Shirakura： じゃあ私の方からいいですか。えーと、こっちで大学、大学院卒業して、今こっちのアメリカの会社で働いてるんですけど、アメリカの教育っていうか、大学の教育で役に立ったのが、先ほどトムさんもおっしゃってましたが、その考え方みたいなものもありますし、あともう一つ重要だと思ったのが、伝え方っていうのが結構重要です。教わった中ですごい役に立ったと思っておりまして、そのイングリッシュライティングのクラスとかっていうのを取ると、かなり内容が実践的なんですね。例えば説明書の書き方とか、会社でのコミュニケーションの時にどういう風に、Eメールを書くとか、かなり具体的な例で、じゃあこういう課題でやってみましょうっていうのがあって。じゃあセンテンスのストラクチャーはもうこうすればいいんだ、っていう形で決まってる、それに当てはめていってほしいな形になって、実際にそれが今の働いてる時にも結構役に立ってたりするんです。そういう英語の文章を書くっていうところからさらにもう一歩進んで、どうやってコミュニケーションを取るかっていうのがある程度もう形が決まっている。それをさらに大学で教えてもらえたっていうのは、結構こちらで働くにあたってすごいプラスだったのかなというふうに思います。で、そのプラスをそれまで高校とか中学でももちろん取ったことがなかったのですが、そういうふうにもう形が決まってるんだっていうのを知ったことがすごい新鮮でした。ありがとうございます。

司会： もう一名いらっしゃいますでしょうか。平岡先生、アメリカのスタンフォードで勉強されたでしょ。日本の教育の問題点などを。

平岡： 私は日本を出たのが大学卒業してすぐでしたので、教育の今の状態を知らないんですけども、日本とアメリカの差もあるかということですが、日本の学生がみな勉強せずに遊んでいるというわけではなく、大学間の差、個人差ができていくのかなと感じました。私は大学時代理系だったのですが、進振（進学振り分け）もあり、理系学生は遊んでばかりはいられませんでした。文系学生が遊んでいた、という意味ではありません。今の学生さんの多くは勉強していると思います。違いの一つは、日本では理工系の学科に行く女子が少ないということです。スタンフォードや欧米の大学ですと、すごくエネルギッシュな女性の先生が工学部なので教えています。例えば核融合のベンチャーとかのセミナーとかで、世界的にも女性研究者が活躍しています。日本ってどうしてこんなに女性が行かないのかってすごく不思議です。OECDのPISAの結果を見ると、日本の女子生徒の理数系のレベルっていうのは世界でも高いレベルにあり、男女差もない。なのにどうして日本は女子が理工系に行かないのかは不思議です。また、大学の先生の教え方がアメリカと日本でかなり違うと思います（個人差はあると思いますが）例えば大学時代の統計の授業を落としそうになったのですが、アメリカでの授業は、明確で、わかりやすかったです。

先生方の学生を教育していくような仕方っていうのが違うような気がしました。

釣島： その通りだと思うね。腹が立つ。アメリカって先生方は教え方に工夫し苦労してるね。それはね、僕思うけど、中高でもそうですよ。大学だけじゃなくて、やっぱりアメリカの先生はよく考えて学生に人気ができるよう

に工夫されている。アメリカの学校では、先生方は厳しく勤務評定されるけど、日本の大学なんてほとんど勤務評定はされないですからね。それで教え方などにあまり工夫しない。これも大きな問題ですね。先生の教え方を変えるということが大事やね。

司会：確かにね、教え方のところで、アメリカだからって先生がみんな上手なわけじゃないしね。先生によってね、教え方、頭がいいんだけど、教えるのがあまり上手じゃない先生もいるのかなと、ちょっと思ったりしました。

釣島：大永さんね、アメリカには、ある一定の業績を残す先生の終身雇用が獲得される資格であるテニアという制度がある。日本はこの制度がなく全員に先生方は終身雇用が約束され首にならないよね。

司会：テニアですか

釣島：それがね、アメリカでは中高もテニアがあるのね。うちの息子はアメリカの中高の先生でしたからわかるんだけど、中学高校の先生にもこのテニアはある。日本では絶対クビにならないよ。これはね、僕らも大学で先生の勤務業態殆どされてないんですよ。他の大学の先生にも聞いてみたけど、ないね。この勤務評定がされないことが日本の先生が教え方に努力をしないと言うことの一つの影響があるのかと思いますね。

司会：本当にね、準備したアジェンダ 70%ぐらいしか話してないですけども、結構いろいろ活発にできてよかったと思います。まず時間となりましたので、本日のフォーラム、ディスカッションは一応これで終了とさせていただきます。皆さんの貴重なご意見、活発な議論に心から感謝申し上げます。それから最後にちょっとお知らせが 2 つありまして、1 つは JABI のほうですけども、アメリカにいる人に限るのかな。JABI ではインターンとかボランティアを随時探しておりますので、この日米間のやりとり、人材交流、人材育成とかですね、ご興味ある方はぜひ参加してください、応募してください。それから今日のフォーラム、ディスカッションですね、アンケートを準備してますので、またメールでも全員に配信します。

本日はお忙しい中本当に皆さま、このジョイントフォーラムオープンディスカッションですね。パネルに参加いただき大変ありがとうございました。今回のフォーラムでは、幅広い世代の方々から数多くの貴重な意見を伺うことができ、非常に生産性の高い議論ができたと思っています。皆さまの積極的なご参加に心から感謝申し上げます。記録として PDF にまとめる予定をしております。しかし大切なその後だと思うんですよね。記録に残すだけでなく、その先の行動として議論しておしまいになるんじゃなく、今日得た知見を実際の仕事や社会活動に生かし、変革を生み出すことが大事じゃないかなと思っています。ぜひこのフォーラムでの学んだことや気づいたことを、皆さん自身のネットワークやソーシャルネットワーク、さらには専門ジャーナルなどを通して、発信してこの議論をこれからもどんどん広げて、みんなが将来、未来の教育に対して、どうするべきなんだろうと、それを常に答えはもう即出るわけじゃないので、これからずっと考えていくことが大事だと思います。

AI とかの出現で、これからすごく厳しい時代になってくるとは思いますけども、次の世代の若い人たちに付ないでいけるような、アドバイスできるような大人になっていければいいかと思っています。改めまして今日は本当ご参加ありがとうございました。最後に今日のジョイントフォーラムの企画議員にあたり、貴重な時間を費やしてくださった皆様、それからインターンの皆様を含めた関西ベンチャー学会、そして JABI の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。また機会にお会いできることを楽しみにしております。ありがとうございました。ありがとうございました。

END